

アルジャおばあさんのめんどり イタリア

アルジャおばあさんは、めんどりを一羽とたくさんひよこを飼っていました。
ある朝、おばあさんは、めんどりたちにえさをやっていました。

「これが最後のご飯だよ。あしたの朝はもうなんにもやる物がないんだよ。おまえたち、自分でなんとかやっておくれ」

めんどりはいました。

「じゃあ、マレンマへ行って太ってくるわ。市の日までには帰って来ますからね」
めんどりは、ひよこたちを連れて出かけました。

コツ、コツ、ピヨ、ピヨ、コツ、コツ、ピヨ、ピヨ

とちゅうまで来ると、きつねに会いました。きつねは、

「おまえを食べちゃうぞ。それともひよこにしようかな」といいました。

「食べるですって。ひよこたちがどんなにちっぽけだかわかるでしょ。マレンマの帰りまで待っているほうがいいと思うわ」

「いつ帰って来るんだ」

「市の日までに」

「よし」

というわけで、めんどりとひよこは歩いて行きました。

コツ、コツ、ピヨ、ピヨ、コツ、コツ、ピヨ、ピヨ

どんどん歩いて行きました。

コツ、コツ、ピヨ、ピヨ、コツ、コツ、ピヨ、ピヨ

マレンマに着くと、もう市の日が近かったので、

「さあ帰らなくちゃ。おばあさんが待っているもの」と、めんどりはいました。そこで、みんなは回れ右をして、うちに向かって歩き出しました。

コツ、コツ、ピヨ、ピヨ、コツ、コツ、ピヨ、ピヨ

少し行くと、きび畑がありました。

「ほらごらん。あそこにきびがたくさんあるわ。お腹いっぱい食べましょう。食べ終わったら、おべんとうに、きびを一本ずつ口にくわえて帰りましょう」

すると、一番後ろにいた一番小さいひよこがいました。

「でも、ぼく持てないよ」

「いいわ。あなたには、みんなで少しずつ分けてあげるわ」

みんなは歩いて行きました。

コツ、コツ、ピヨ、ピヨ、コツ、コツ、ピヨ、ピヨ

しばらく行くと、きつねが待っていました。

「帰って来たんだな」

「ええ、帰って来ましたよ」

きつねは、めんどりを見て、それからひよこたちを見ました。

「だけど、ひよこたちが口にくわえているのは、そりやなんだ」

「きつねのしっぽよ」

「きつねのしっぽだって？」

「そうよ」

「それで、その一番後ろのちびすけは、どうしてくわえていないんだい」

「あんたのしっぽをくわえるんだよ」

それを聞くと、きつねは、すっとなで逃げて行きました。

めんどりとひよこたちは、アルジャおばあさんの家に帰り着きました。おばあさんはひよこをみんなかごに入れて市に持って行きました。それで、お金をいくらか手に入れましたとき。

おしまい。

原話…『イタリアの昔話』剣持弘子／三弥井書店
再話…村上郁